

一週間を考える

松浦 純子

先日、歯科医院に行き順番を待ちながら、ぼーっと外を見ていた。入口のガラス戸の外側には、診療曜日と時間が大きな字で書いてあった。することもないで、「月火水木金土日のうち水・日は休み、それ以外は昼休みを二時間とって、土は午前プラスαの診療か」と歯科医の勤務時間を計算していた。

あれっ、なぜ裏から見ても漢字をそのまま読めたのだろう。そうか、曜日の漢字はほぼ左右対称なんだと気付いた。これらの漢字は全て小学一年生で習うが、学校の時間割は一週間単位で回り、子供達が曜日の漢字を覚えることは時間割を確認する上でも必須の学習だ。曜日の漢字は偶然、ほぼ左右対称なので子供たちも書きやすい。習字で最初に書く漢字は一・二・三や山・川である。多少バランスを崩したとしても、へんが小さくつくりが異常に大きくなることもない。

私たちは日にちを間違えることはあっても、意外と曜日は間違えない。つまり、現代人の体内には一週間サイクルの体内時計みたいなものが働いているのではないか。例えば、「書こう会」も木曜日が会合の日だ。「毎月三が付く日が会合です」と言われると、今月は金月木、来月は水土火などとなり、忘れやすく予定を立てにくい。曜日を単位としているのは大げさに言えばその組織（学校や会社など）に属している人が覚えやすく、無理なく動けるためではないかと思う。

一週間を七日とする考えはメソポタミアで最古の都市文明を築いたシュメールで始まり、バビロニアで確立したと言われている。宗教とも結びつき、六日働いて七日は「安息日」や「聖なる日」となる。日本の暦も江戸時代まではメソポタミア同様に太陰太陽暦を使いながら、民衆の生活は七日ではなく十日をひとまとまりとして考えることが多かった。全国にある四日市、八日市などの地名、四が付く日の縁日、今でも銀行や道路が混むという五十日ごとという考え方など、日本独自の生活に根差した古い時代の名残を数多く見ることができる。